

わ が さ 和 傘 づ く り

江戸時代の末頃、江戸の青山（現在の港区青山）周辺に住んでいた幕府の下級家臣たちによって行われていた和傘づくりを、農家が副業として取り入れたことで小岩でも和傘づくりが広まったといわれています。明治時代の中頃から昭和初期にかけて和傘づくりが盛んとなり、全盛時代（明治後期～大正末期）には「東京の地張傘」といわれ、特に蛇の目傘は高級品でした。

和傘づくりの中心であった下小岩村（現東小岩二、四丁目）では、明治10年（1877）には全戸数237戸のうち42戸が和傘づくりをしていました。農家の副業とはいえ、盛んになるにつれて専業とする家も多く、一軒で20人余りの職人を抱え、月に200本以上生産する家もありました。「小岩村は傘屋でたつ」といわれ、番傘や蛇の目

傘がずらりと並ぶ風景
があちこちで見られました。

和傘づくりは、骨づくり、口クロづくり、組立て、紙張り、仕上げなどの工程に分かれており、分業によって行われていました。紙張りを行う「張り師」を多く必要としたため、茨城、千葉、秋田方面などからも働



乾燥中の和傘がならぶ小岩の風景（昭和25年頃）

き手を連れてきて年季で雇っていました。

昭和になって、洋傘が普及するにつれて和傘づくりは衰退していきましたが、戦後の数年間は物資不足から洋傘が減り、番傘の生産や張替えなどを手掛けて好況が続いたそうです。しかし、昭和30年頃には和傘の需要が減り、多くは転廃業しました。

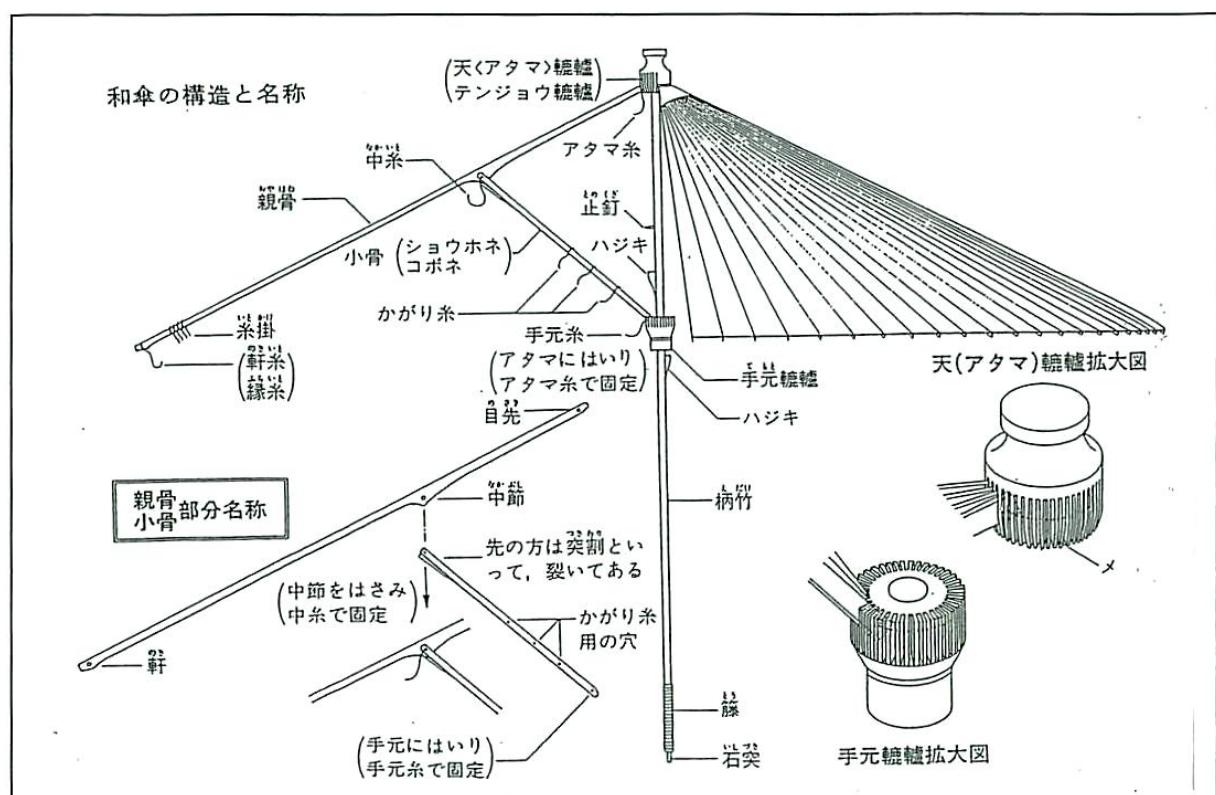
小岩の和傘づくりに使われていた「和傘製造用具」は、昭和57年(1982)に区指定有形民俗文化財(民俗資料)に認定されました。



口クロ、穴あけ、紙張りなどの道具



漆や糊を塗るための刷毛と皿



和傘の構造と名称（「岐阜の和傘」『技術と民俗〈下〉日本民俗文化体系 第14巻』小学館 1986年）